

児童思春期精神科における日課や行事を通したケア

○遠山 梓¹⁾、吉武 慎治¹⁾、高橋 歩夢¹⁾、佐藤 典子^{1,2)}、長野 真澄³⁾、湯浅 度恵⁴⁾、村上 晶代⁵⁾、船越 明子⁶⁾

1) 東京都立小児総合医療センター、2) 聖徳大学大学院児童学研究科、

3) 国立研究開発法人国立国際医療研究センター国府台病院、4) 信州木曽看護専門学校、

5) 大分県立病院精神医療センター、6) 神戸市看護大学

児童思春期精神科に入院している子どもは、精神疾患の症状や発達障害の特性から、精神的に不安定、暴力や器物破損がある、自分を傷つける、強迫症状、他者とうまく交流できない、ルールを守れない、学校に通えない、昼夜逆転した生活、日常生活行動に問題がある、食べられないなど精神的・身体的・社会的な課題を抱えている。子ども達が入院している児童思春期精神科病棟では、医療チームによる個別の治療プログラムだけでなく、日課や行事という集団で行う治療プログラムがある。日課は、病棟単位で、1日1~2回、1回30分程度で行われる活動で、入浴・私物整理というADLに関連する活動、散歩・園芸・室内遊び・創作・体育という学びや余暇に関連する活動、集団精神療法やSSTという社会性に関連する活動を行っている。行事は、病棟単位だけでなく児童思春期精神科の全病棟合同で、芋掘り・餅つき・山登り・夏祭り・展覧会・クリスマス会という季節を感じられる活動を行っている。日課や行事では、子どもが集団の中でどのように存在し、どのように立ち居振る舞い、活動していくのかを行動観察する。そして、活動を通して、ルールを守る、スケジュールに沿って行動する、得意なことにも苦手なことにも取り組んでみる、見通しを立て

計画的に準備や片付けもする、主体的に行動する、他者と協働して取り組む、仲間意識を持つ、達成感を得るなどを子どもが練習し獲得していけるようにケアしている。2019年11月以降、COVID-19は緊急事態宣言や外出自粛要請といった様々な社会的影響をおよぼした。慢性的なストレスが持続し、子どもたちは普段以上に感染対策を踏まえた入院生活を送ることになり、集団での活動は厳しい制約が設けられた。人間としての自由の制限、社会的距離は孤立を招きやすく、不安や恐怖、対人接触の減少による、子どもの健やかな心理社会的な成長の影響は大きい。現在は少しずつ日常生活がもどりつつあるが、再適応のストレスの問題もある。そういった現状のなかで、児童思春期精神科における日課・行事を通したケアはCOVID-19以降、さらに重要な意味を持つと考える。本ワークショップでは、2つの医療機関における日課や行事を通したケアの現状について問題提起し、3グループに分かれて参加者の皆様が実践している日課や行事を通したケアについて共有と検討をしていく。子どもへのケアを実践している方だけでなく、大人へのケアを実践している方、医療施設だけでなく地域で実践している方もぜひご参加ください。